

SHOW HEY シネマルーム

★★★

2番目に幸せなこと

2000 (平成12) 年6月21日鑑賞

Data

監督: ジョン・シュレシンジャー
出演: ルパート・エベレット/マド
ンナ/ベンジャミン・ブラッ
ト

👁️👁️ みどころ

ゲイとの「結婚」というテーマが面白い。
そしてマドンナの魅力がいっぱい。タイトルも本当にピッタリ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<2番目の幸せとは・・・>

この映画は、見方によっては、かなりショッキングな作品。そして、この映画が描くゲイの男性と、普通に結婚し愛する男性との子供を望む女性アビー・レイノルズ (マドンナ) との、真面目だけれども少しケツタイな夫婦関係を見れば、1番ではなく、「2番目に幸せなこと」という日本語タイトルの「センスの良さ」をよく理解することができる。

原題は「THE NEXT BEST THING」だから、日本語のタイトルの方がしゃれているし、この映画の本質を、より見ていると思う。

ストーリーはわりと単純。ロサンゼルスに住み、ヨガのインストラクターをしているアビーは、恋人ケヴィン (マイケル・バルタン) と暮らしていたが、ケヴィンは彼女と別れる決心をしてしまった。アビーはもう30代。この年になっての、恋人との別れはつらい。そして子供も欲しい。彼女は「早く産まないと・・・」と焦ってしまう。

ケヴィンとの失恋を告白された、アビーの男友達のロバート (ルパート・エベレット) はゲイ。もちろん、これはアビーも知っている。やさしく彼女を慰めているうちに、2人は昼間からカクテルをガブ飲みする羽目に。そして・・・そこは肉体的、生理的に男は男、そして女は女。すっかり酔った2人はいつの間にか、男と女の関係に・・・。これはヤバイ。せっかくアビーとロバートは、いい友達だったのに。その上、運命の神様のなせるわざか (実はそうではなく、映画のストーリー展開のための単なる作り話だが・・・)、

たった1晩の、いわゆる「肉体関係」「H」により、アビーは妊娠したというのである。さあ、2人はどうするか……。

ここからが、日本の「常識人」には理解できない展開となる。すなわち2人は婚姻の届出はしない、従って、法律上の夫婦ではない。しかしながら子供は産む。そして、3人で幸せな「家庭」を築く、という方針を決定するのである。

1番目に幸せなことは、愛する彼氏、彼女と結婚して、子供を産み、家庭を築くこと。しかし、ゲイのロバートとアビーにはそれは無理。それなら、「2番目に幸せなこと」として、心を許し合える2人が、子供を産んで、3人で共同生活を営む途を選択したのである。夫婦ではないから、2人は親友のまま。従ってそれぞれの恋愛は自由で、不倫や浮気という言葉にも無関係。また、離婚もない。これには、さすがにまわりの友人たちも驚いた。しかし、「進歩的な」2人の関係は順風満帆。このまま「共に白髪が生えるまで……」といけるのか……。ところが、現実はそうではなかった。

<マドンナの生き方の魅力>

生まれた息子、サムは今ではもう16歳。両親の「不自然さ」にも気づく年齢となった。ロバートは、息子への愛情一本だが、美しいアビーには、また新しい恋人が……。これがまたカッコイイ。アビーの勤めるヨガの教室でアビーに一目惚れした、新しい恋人ベン（ベンジャミン・ブラット）は銀行の投資家。単に金持ちというだけではなく、何と、アビーとロバートとの変な「関係」にも理解を示す、アビーにとって、理想的な男性だ。従ってアビーは、ベンとの結婚を望み、ニューヨークへの引っ越しを提案する。さあ、こうなるとアビーとロバートとの関係にはヒビが入ってくる。ロバートはアビーを失いたくない。ところが「子供を連れてきてもいいよ」というやさしいベンの言葉に従って、アビーは息子サムを連れて、ニューヨークのベンのもとへ去ってしまった。

やむを得ず、ロバートは弁護士に相談し、子供の養育権を主張し、息子サムを引きとるための裁判を提起する。一方、アビーは……。過去を一切清算して、ベンとの新しい生活に入ることができればいいが、サムは父親のロバートを恋しがる。それとともにアビーの気持ちも揺れ動く、そして……。

この映画を観るまで、歌手「マドンナ」はもちろん知っていたが、こんなに魅力的なオナナとは知らなかった。アビーの年齢は、マドンナの年齢に合わせてか、30歳をかなり超えた役柄となっているが、そんじょそこの若いオナナにはない魅力を見せている。仕事に、恋に、そして家族に、息子にと、前向きに全力投球するマドンナの生き方は、実に魅力的だ。

この映画の主題歌「アメリカン・パイ」は、1972年に全米チャート1位となった曲とのこと。その他、この映画の中で流れるマドンナの曲は多いが、耳に残る美しい旋律の曲が多い。

「本音で生きる」ということはすばらしいことだと、つくづく思う。そして、1番目でなくても、2番目に幸せなことを願ったアビーの生き方の選択にも大いに共感することができる。もっとも落ち着くところは、それほど極端な話ではないが・・・。

マドンナの魅力と、アメリカ的なテーマの設定に脱帽。

2001（平成13）年9月記